

第 128 図 H94 号竪穴建物 (2)

打製石斧・打製石鏃・石錐・石匙・二次加工のある剥片などのような打製の石器、白玉・管玉などの玉類、凹石・磨石・敲石・編物石などのような礫を用いた石器、石製模造品の原材、硯などが出土している。

金属器・金属製品 (第 224 図)

鉄製の刀子、鏃、角釘、銅銭が出土している。

第 V 章 まとめ

西八日町の調査が行われたのは昭和 58 年であり、今から 38 年以上前になる。当時これほど大規模な古代集落の調査が県内で実施された例は稀有であったろう。出土品は貴重なものも多く含まれており、報告書が刊行出来なかったことが悔やまれる。以下各時代毎に若干の総括を記述していく。

縄文時代の遺物は楕円押型文が施される深鉢片が 1 点認められるだけなので節は設けない。

第 1 節 弥生時代

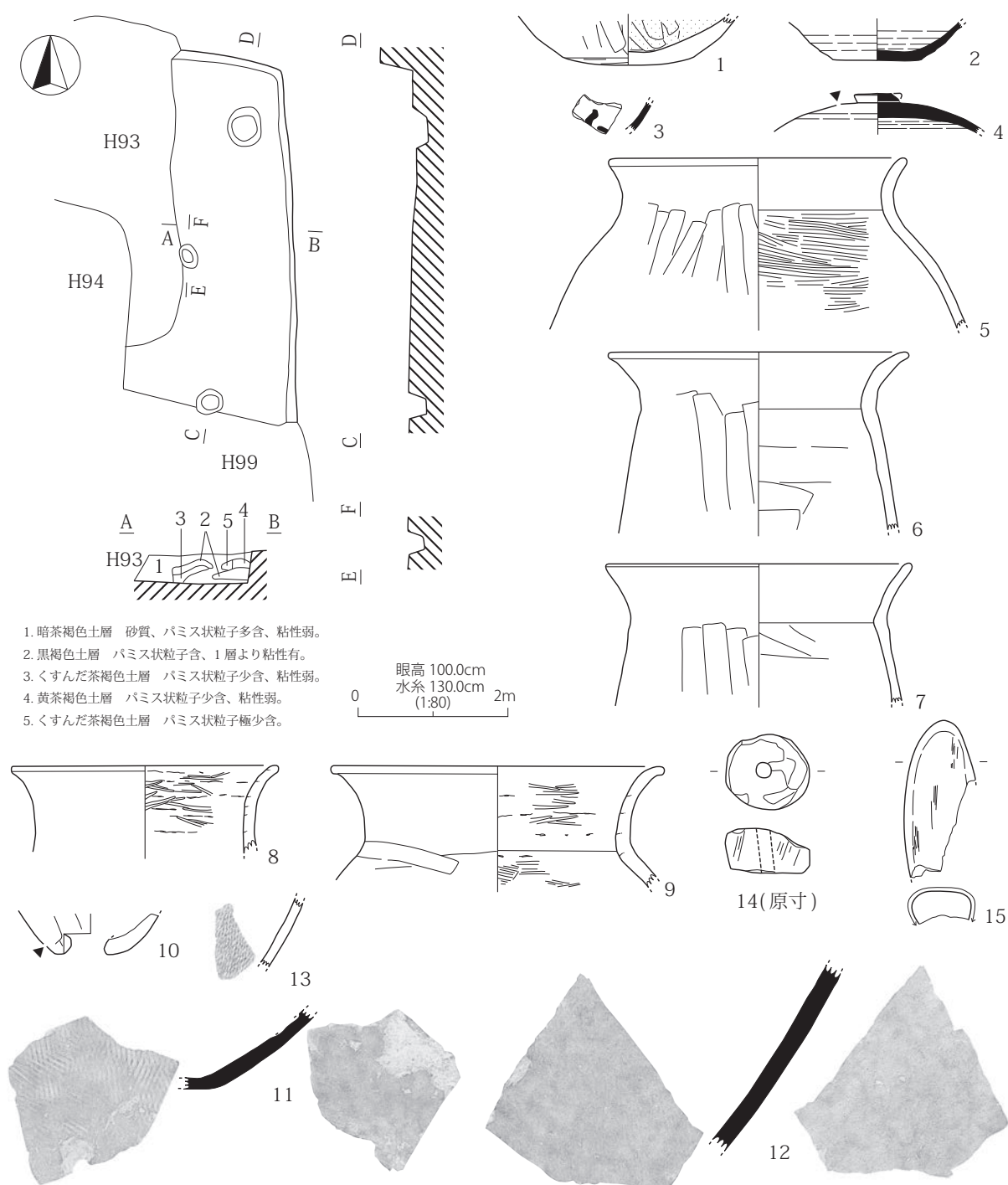
前期

伴うべき遺構は、後世の遺構により破壊され存在しなかったが、弥生時代前期の土器片が、古墳時代以降の竪穴建物の覆土や遺構外から出土している。条痕文が施されるものが大半であるが、その全てを図化したわけではない。第 225、226 図に主だったものを集成し大別した。(図に遺構名がないものはグリット出土遺物である)

I 群は鉢を一括した。赤字のものは浮線文である。H103-32、35 は内面に赤彩が認められる。

II 群は壺を一括した。H90-16 が浮線文の他は沈線文や、撚糸の単軸絡条体などが施される。赤彩が認められるものも少なくない。

III 群は口縁部に数条の沈線が巡る甕である。内面にも沈線が巡るものは少数である。沈線は棒ないし竹管の



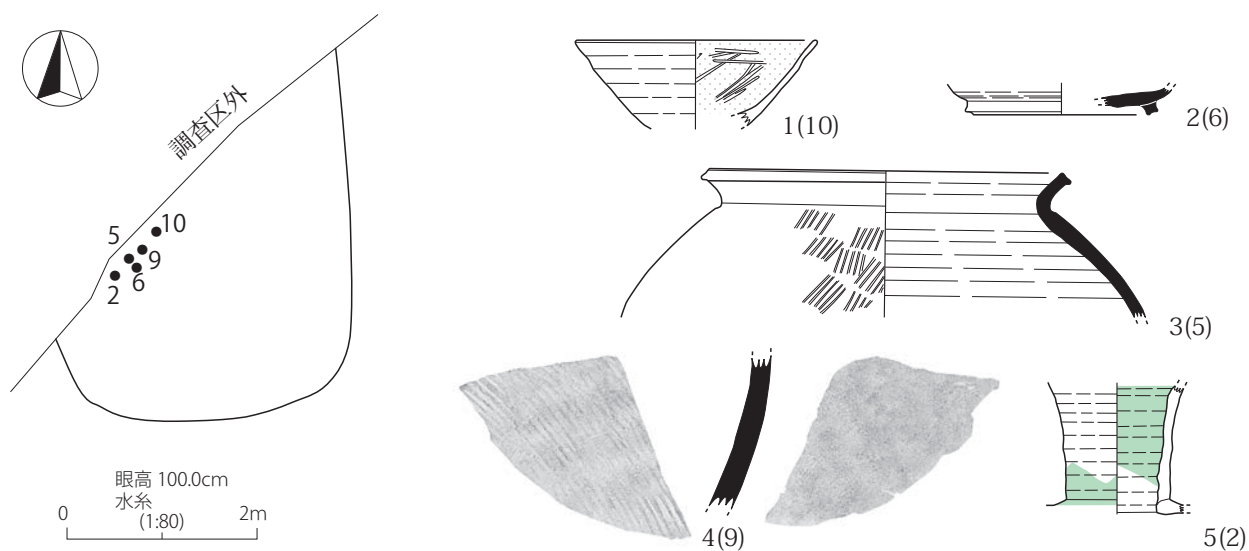
第 129 図 H95 号竪穴建物

背のようなもので描かれるものが大半である。平縁の他に波状のものも認められる。

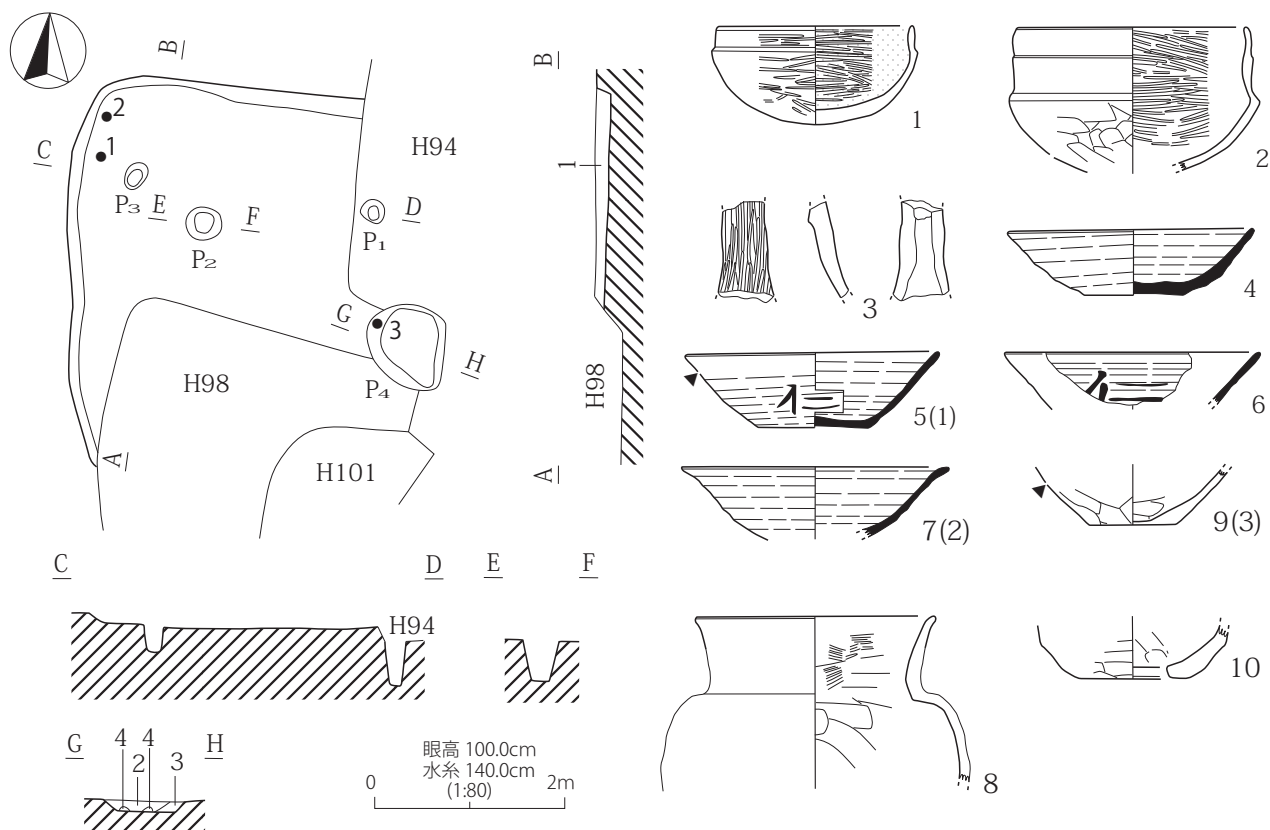
IV群は口外帯をもつものや、口唇部に刻みが施されるもの、口唇部に押捺や刻目が巡るものである。口縁部は平縁と波状のものがあり、条痕が施されるものも多い。無文のものも頸部下には条痕を有するものと思われる。

V群は条痕文が施されるものである。IV群の頸部下のものも含まれている。口縁部が存在するものは、残存部には加飾は認められないが、刻み等が施されている可能性がある。グリット出土資料に1点のみ内外面に条痕が認められるものがある。

VI群は捺糸ないし縄文が施されるものである。捺糸は単軸絡条体である。県内の同時期の遺跡に比べ多めの出土量のように思われる。



第 130 図 H96 号竪穴建物



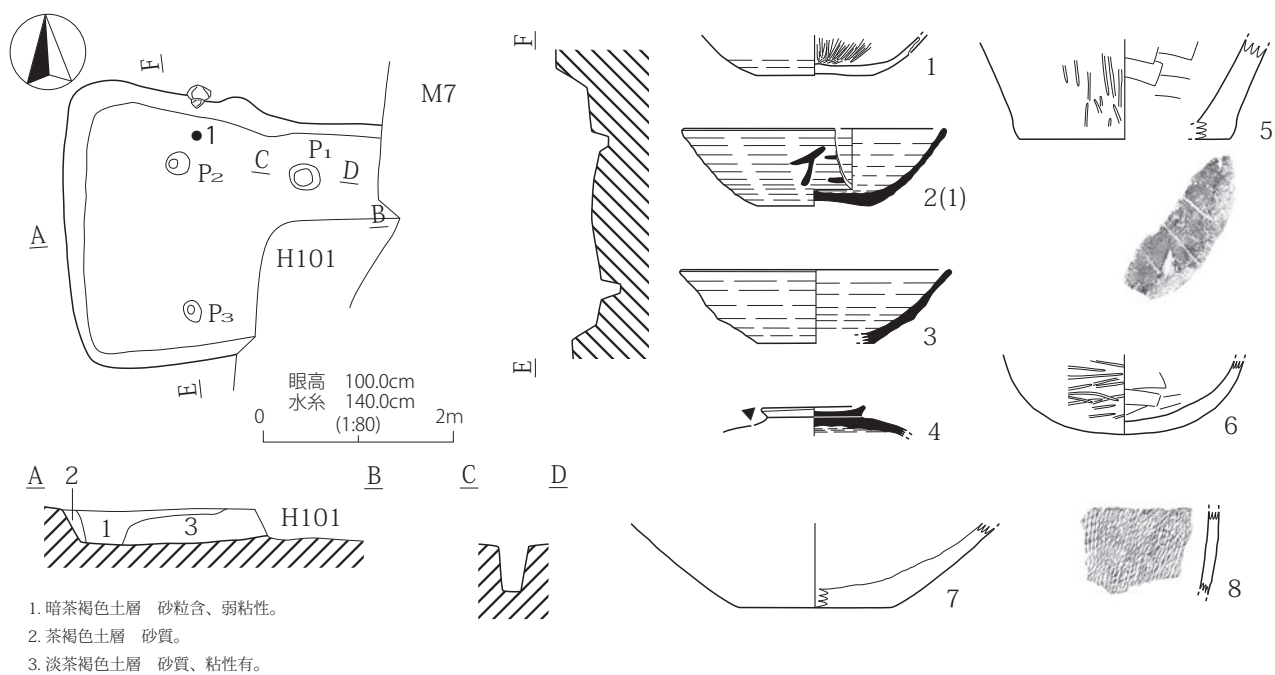
1. 灰茶褐色土層 パミス多含、粘性なし、しまり有。
2. 灰茶褐色土層 灰粒子と焼土多含、炭化物多少含、粘性なし、しまりなし。
3. 茶褐色土層 粒子細かく焼土粒子やや含、粘性やや有、しまり有。
4. 暗茶褐色土層 粒子は 3 層よりやや荒目で焼土粒子と灰粒子わずかに含、粘性なし、しまりなし。

第 131 図 H97 号竪穴建物

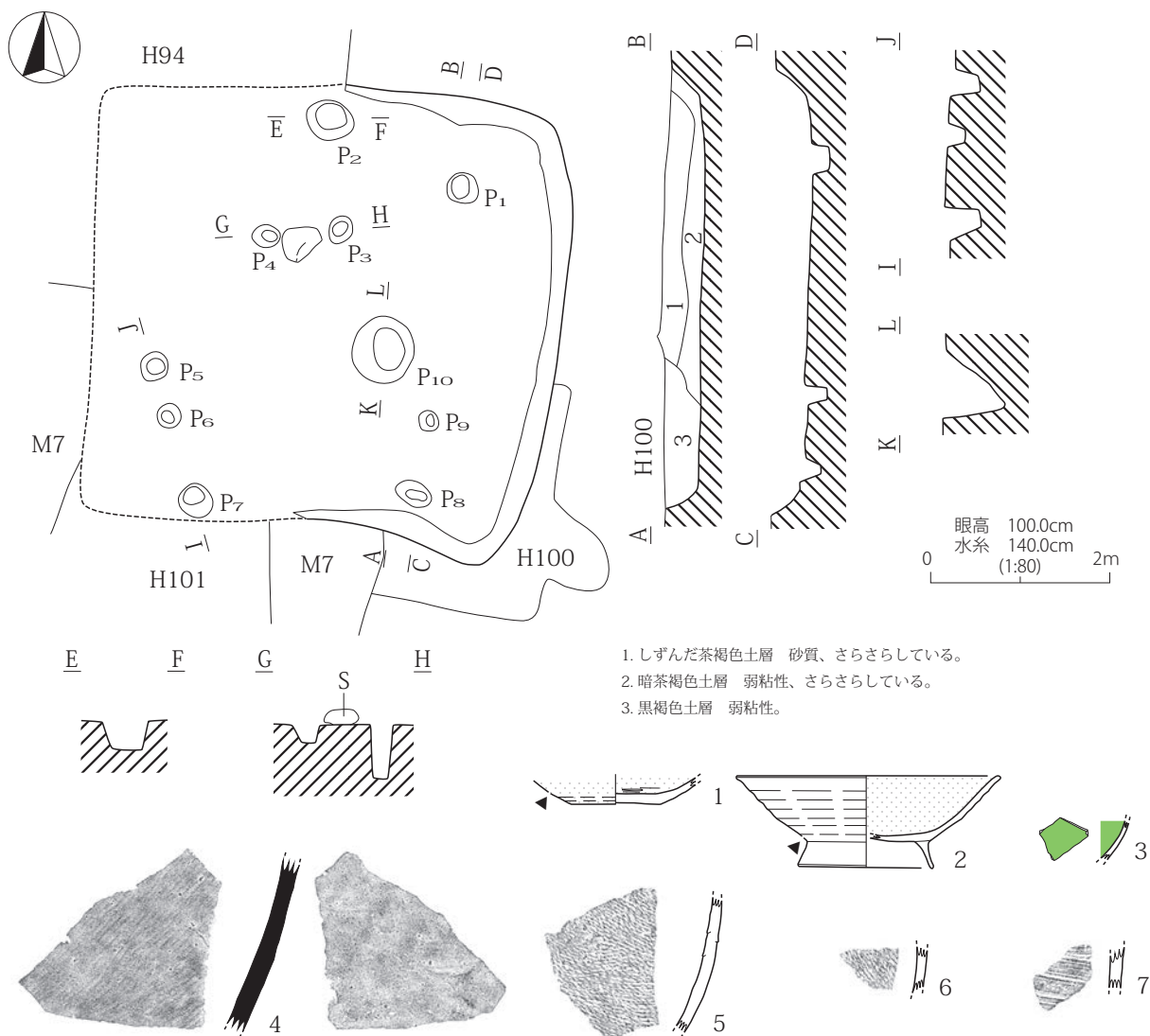
以上の土器群は中沢道彦の氷Ⅱ式に該当するものと思われる。当遺跡は湯川の河岸段丘上に立地しており、やや上流には下信濃石遺跡が存在する。長年の調査から、佐久市内では湯川流域と片貝川流域に弥生時代中期前半以前の遺跡が集中することが明らかになって来ている。

中期前半

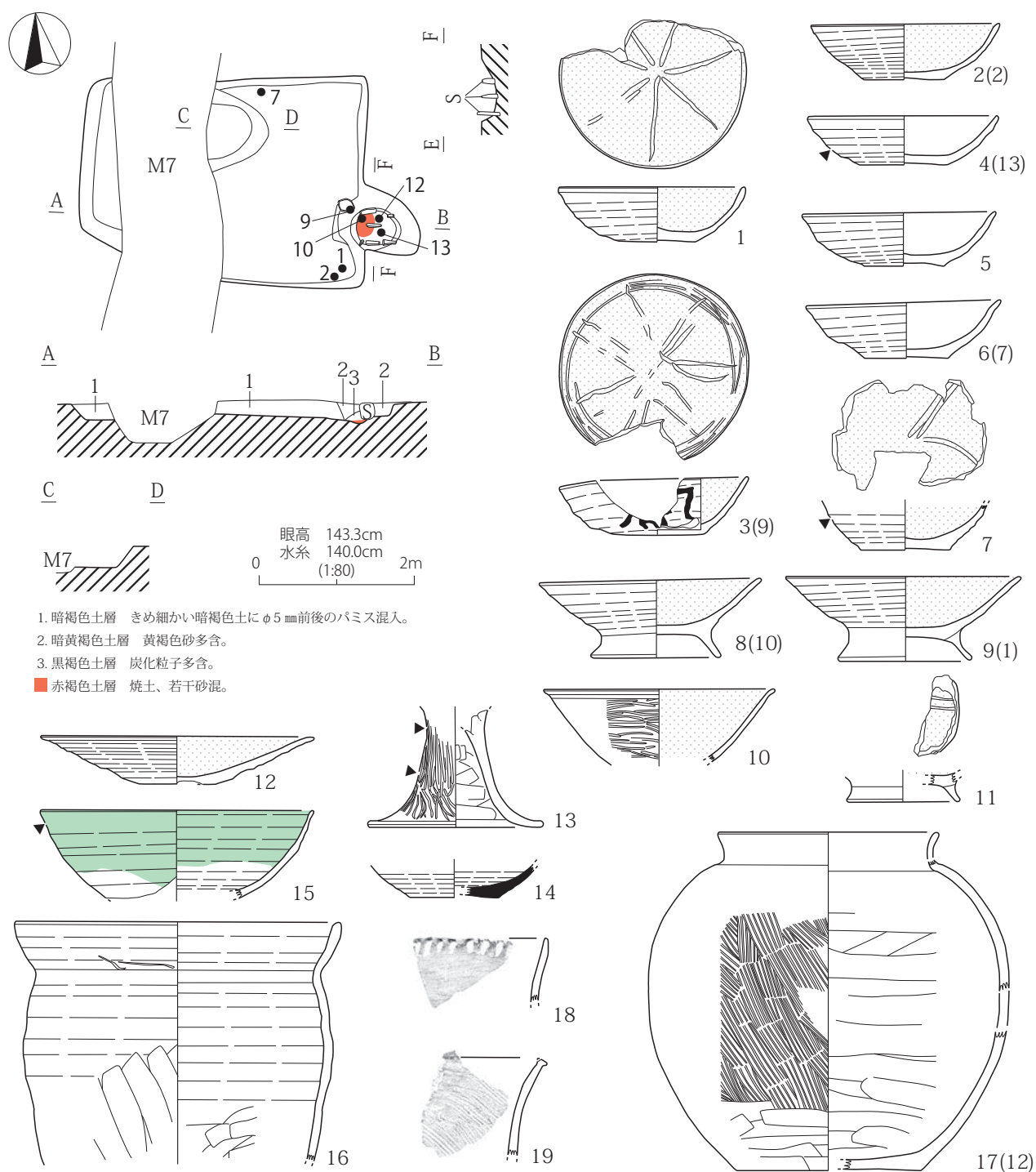
Ⅶ群とした土器は中期前半の資料と思われる。量的には少ないが、前期以降の人々の生活の痕跡が確認された。



第 132 図 H98 号竪穴建物



第 133 図 H99 号竪穴建物



第134図 H100号竪穴建物

中期後半

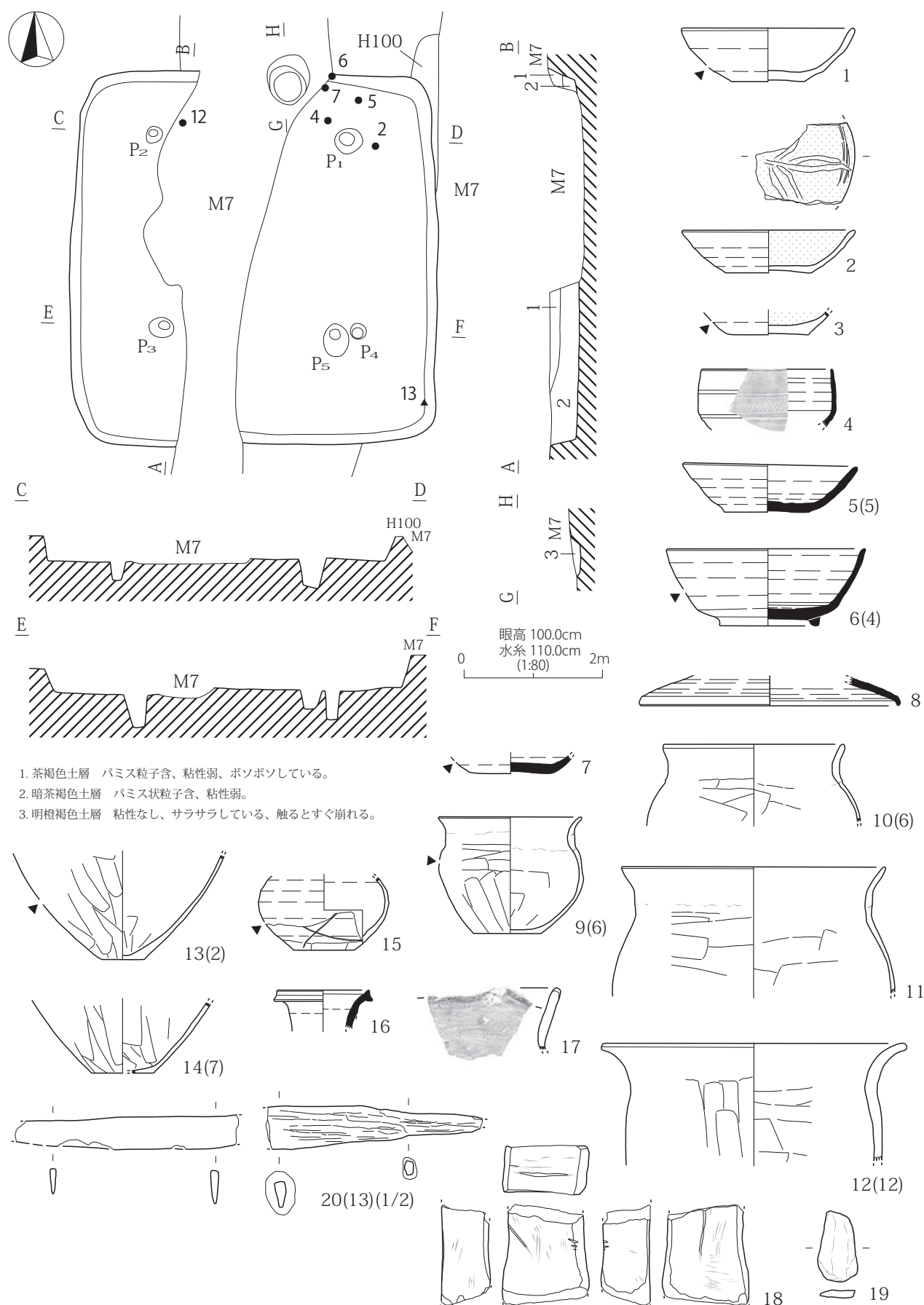
中期後半栗林以降については遺構も検出されており、西八日町遺跡では集落が成立していたことが明らかである。Y1・3・4号竪穴建物などが該当し、小山岳夫の中期後半Ⅱ期(1999、長野県考古学会)の所産と思われる。

後期

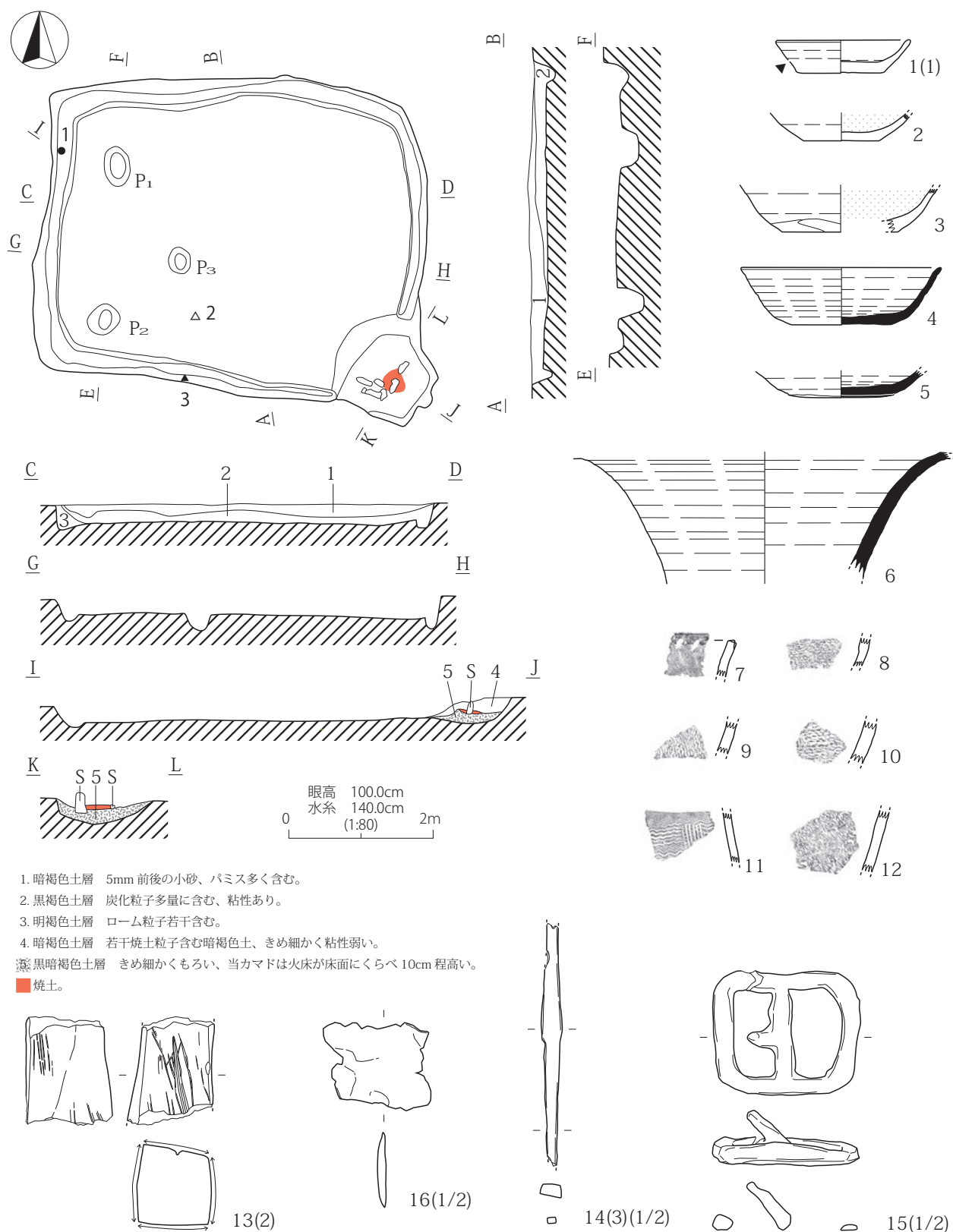
Y7号竪穴建物が該当する。時期的には小山岳夫の後期Ⅲ期(1999、長野県考古学会)の所産と思われる。

西八日町遺跡のⅦ次にわたる調査において、弥生時代の遺構は、本事例以外には第Ⅶ次調査で確認されているだけである。西八日町遺跡の弥生時代集落址は第Ⅰ・Ⅶ次調査範囲の西側に展開しているものと思われる。

尚、Y3号竪穴建物から環状石斧片が出土している。佐久市では3例目の出土である。



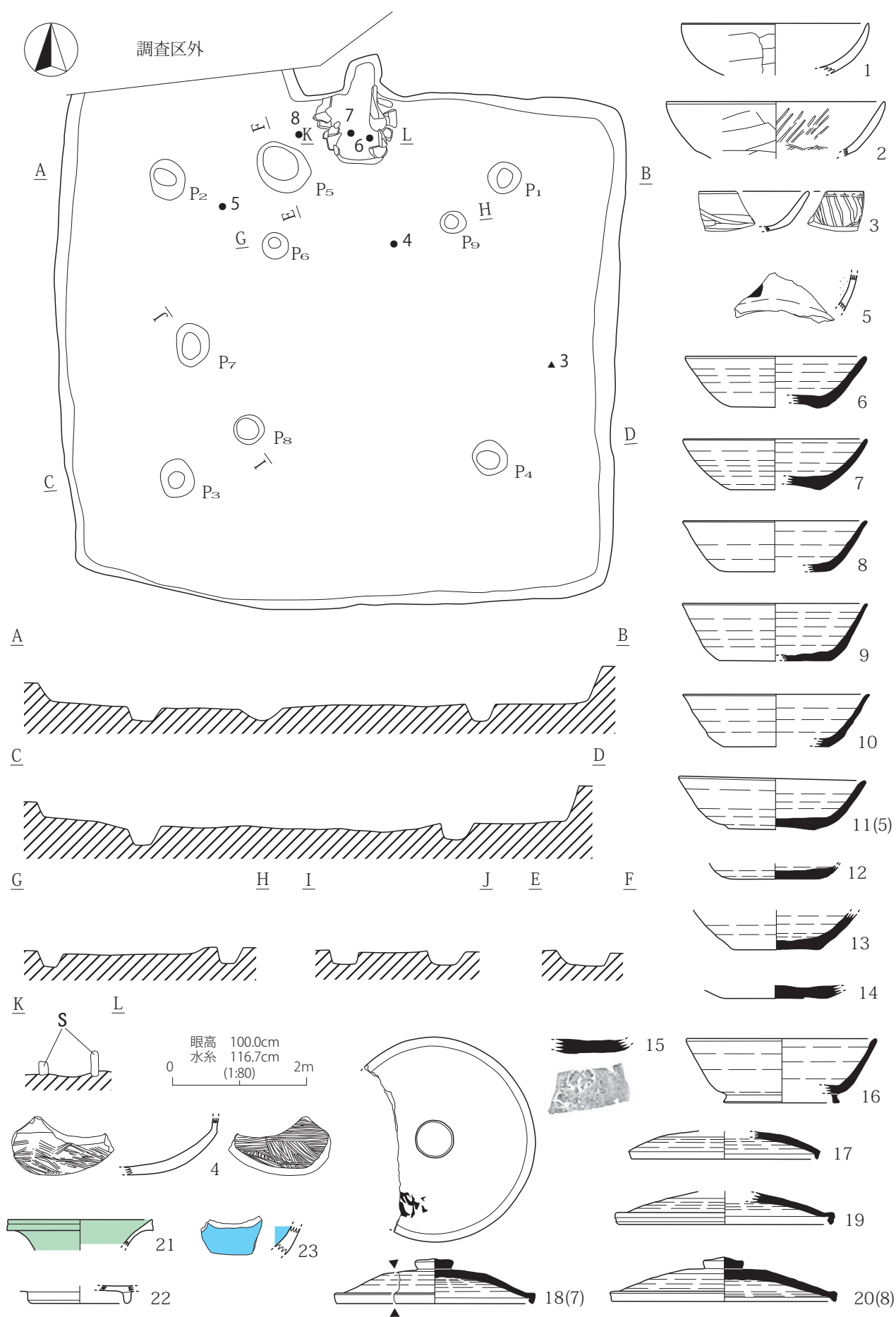
第 135 図 H101 号竪穴建物



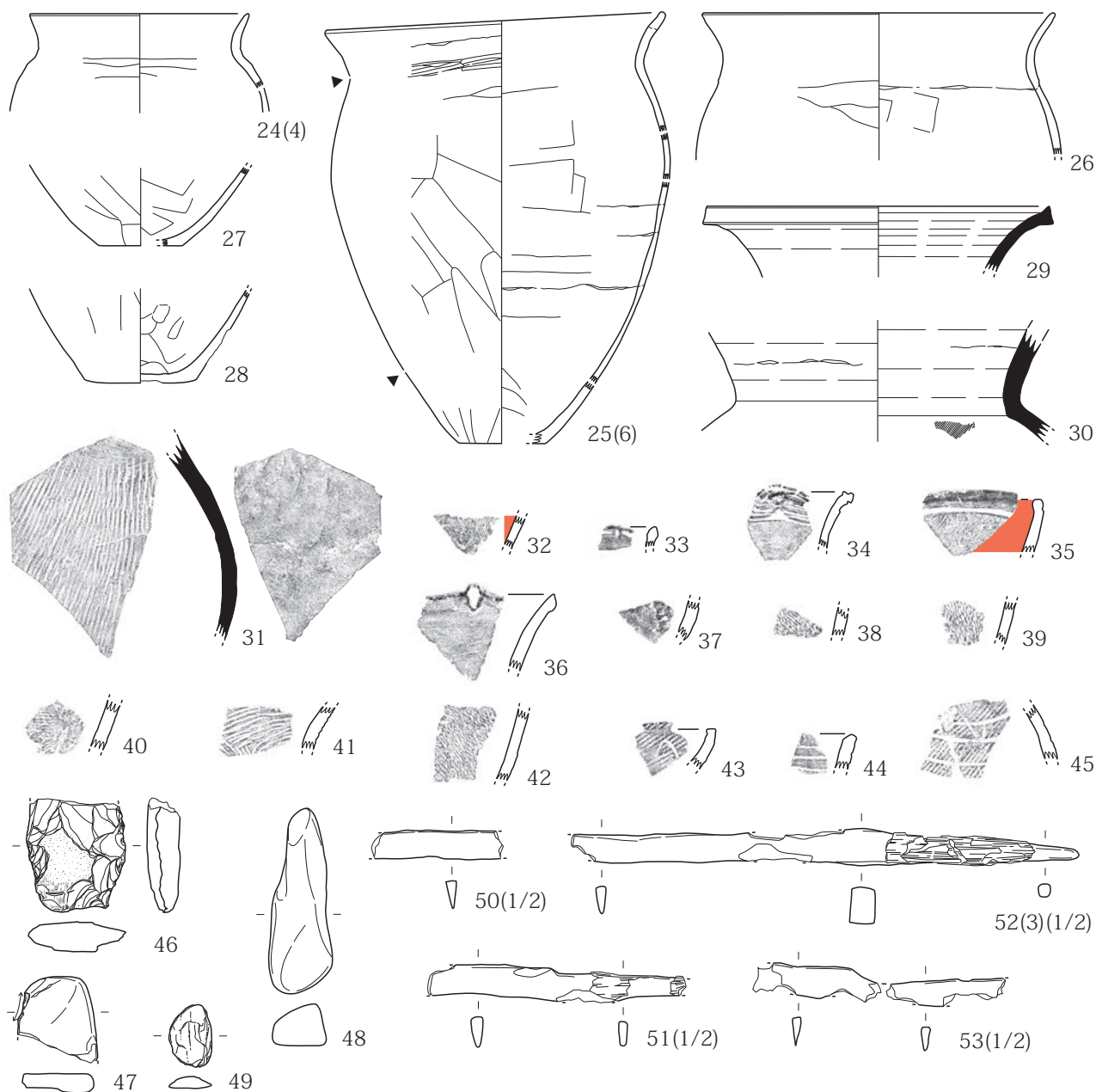
第 136 図 H102 号竪穴建物

第 2 節 古代

4 世紀や 5 世紀前半の遺構・遺物は確認されていない。集落が形成されるのは 5 世紀後半からである。これ以降は古墳時代を通じ集落は連綿と継続する。集落が終焉するのは 10 世紀後半である。鉄器・鉄製品は 5 世紀後半から認められる。器種的には古墳時代には刀子と鏃以外は認められない。奈良時代になると紡錘



第 137 図 H103 号竖穴建物 (1)



第138図 H103号竪穴建物(2)

車や釘が新たに加わり、量的にも増加する。平安時代に入ると、鎌や鍬先などの農具や斧、鋸、絞具、火打金具などが認められるようになり、量的にも更に増加する。銅製品は古銭も含め、10世紀前半に再利用のため板状に延ばされた銅碗片が1例認められるだけである。文字資料は基本的に古墳、奈良時代には認められない。古墳時代に刻書や朱書きの「×」が認められるだけである。平安時代に入ると朱墨が付着した土器や土器片が出土する。字は9世紀代には「仁」、「西永」、「本」、「百」、「用」、「加」、「生万」、「左」、10世紀前半には「安」、「千」、「回」、「吉」、「東」、「令」などが認められるが、判読できないものもある。

字ではないが、9世紀前半のH137からは馬と思われる絵が刻書された土師器皿が出土している。

土器の種類からは、緑釉陶器や白磁などの高級な焼き物が10世紀代には認められるようになる。

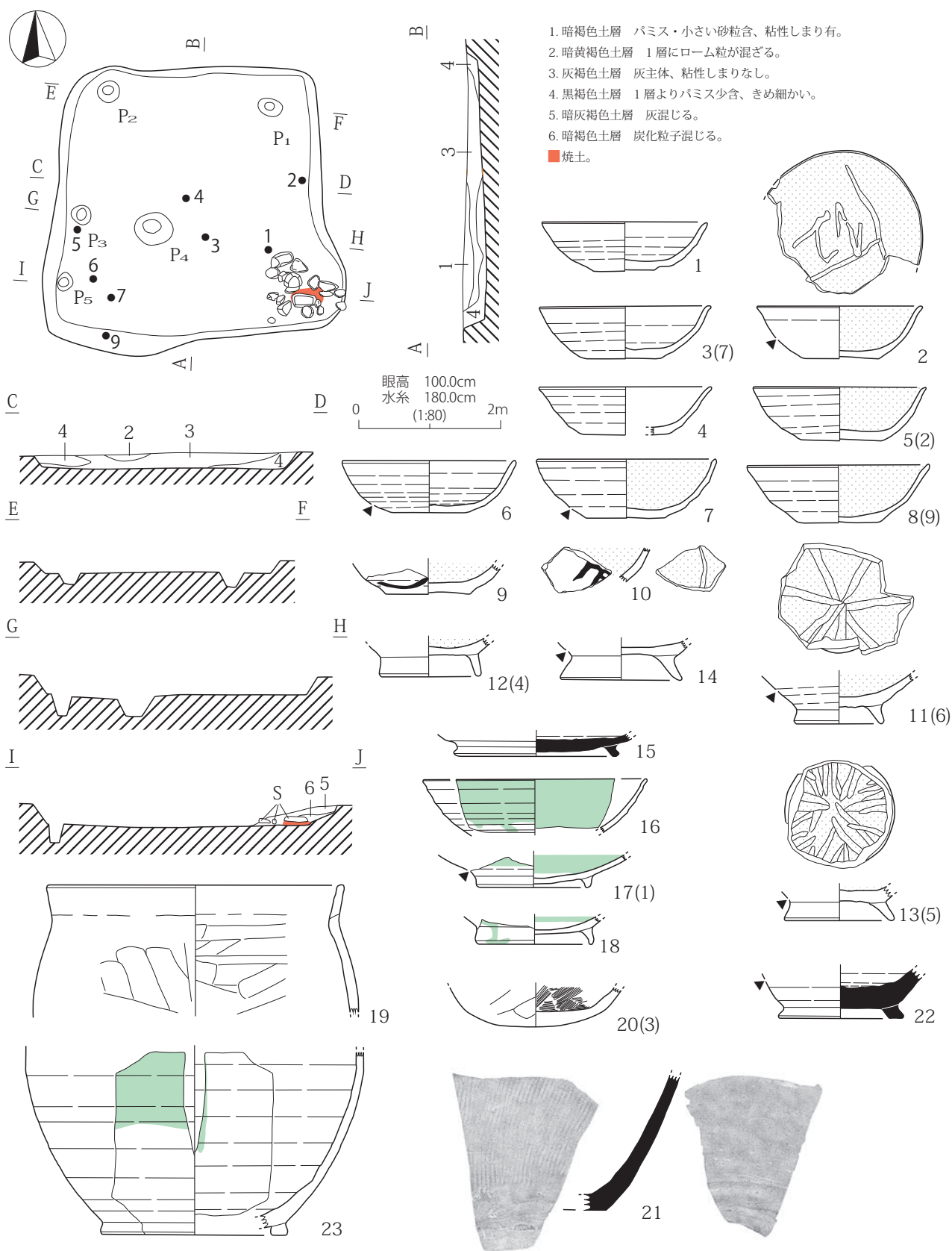
その他に、炭化した横櫛が7世紀代の竪穴建物址から出土している。状態が悪く図化不可能な状態であるが、貴重な出土例である。

竪穴建物の時期別軒数の推移は以下の通りである。

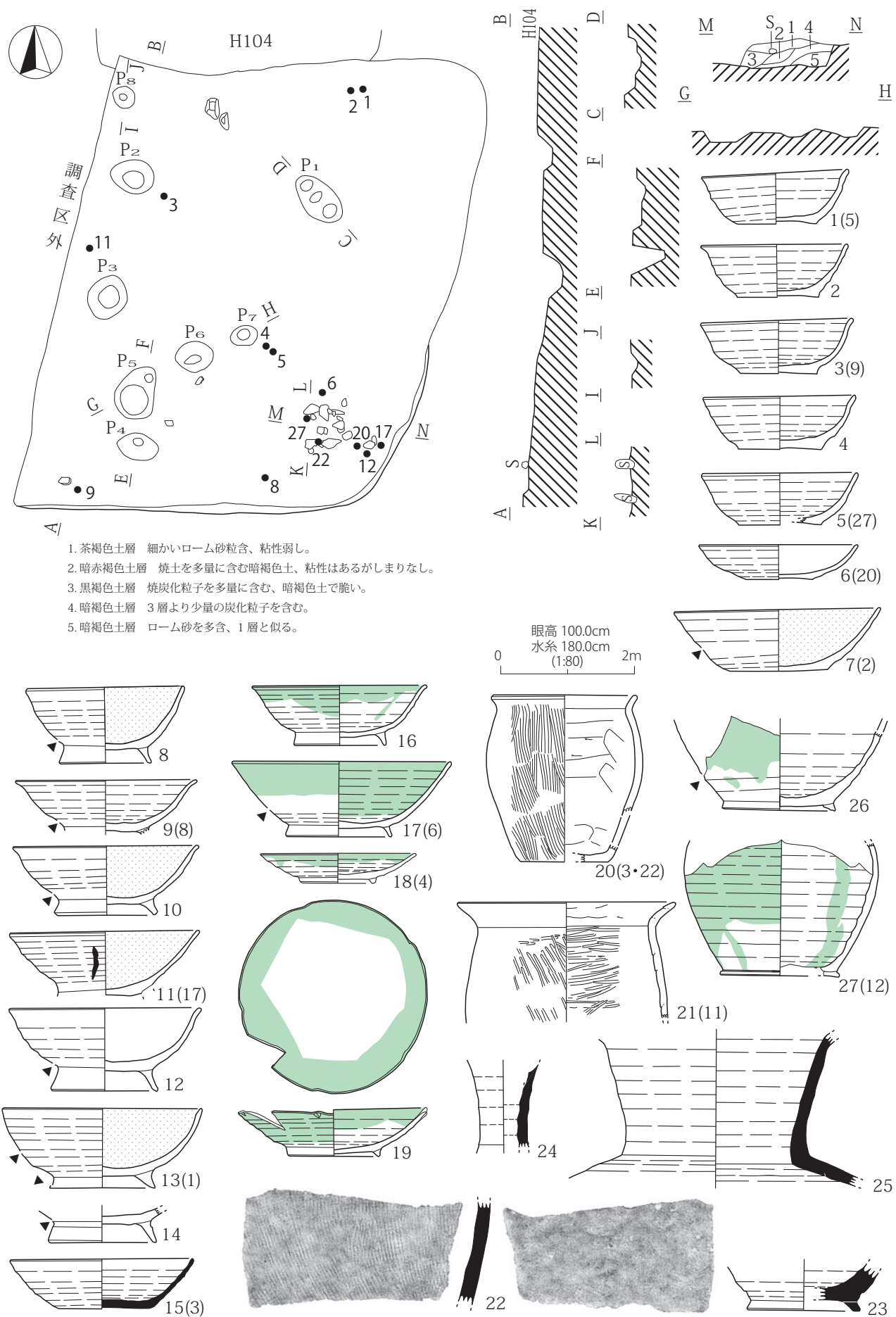
弥生時代中期後半 Y 1・2・3・4・6

弥生時代後期 Y 7

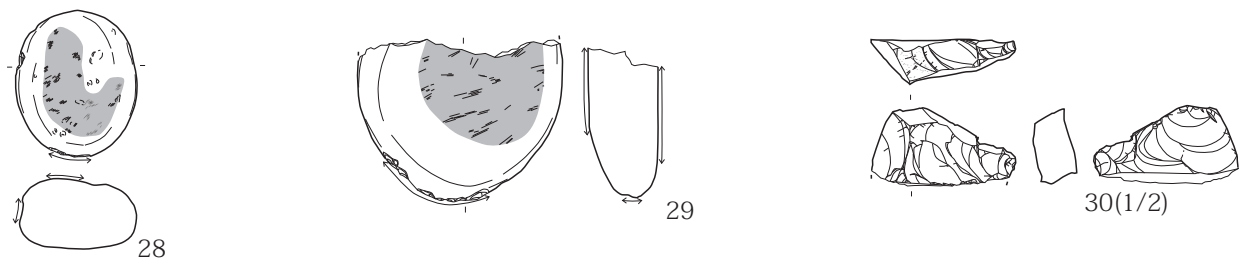
古墳時代5世紀後半 H 20・38・75



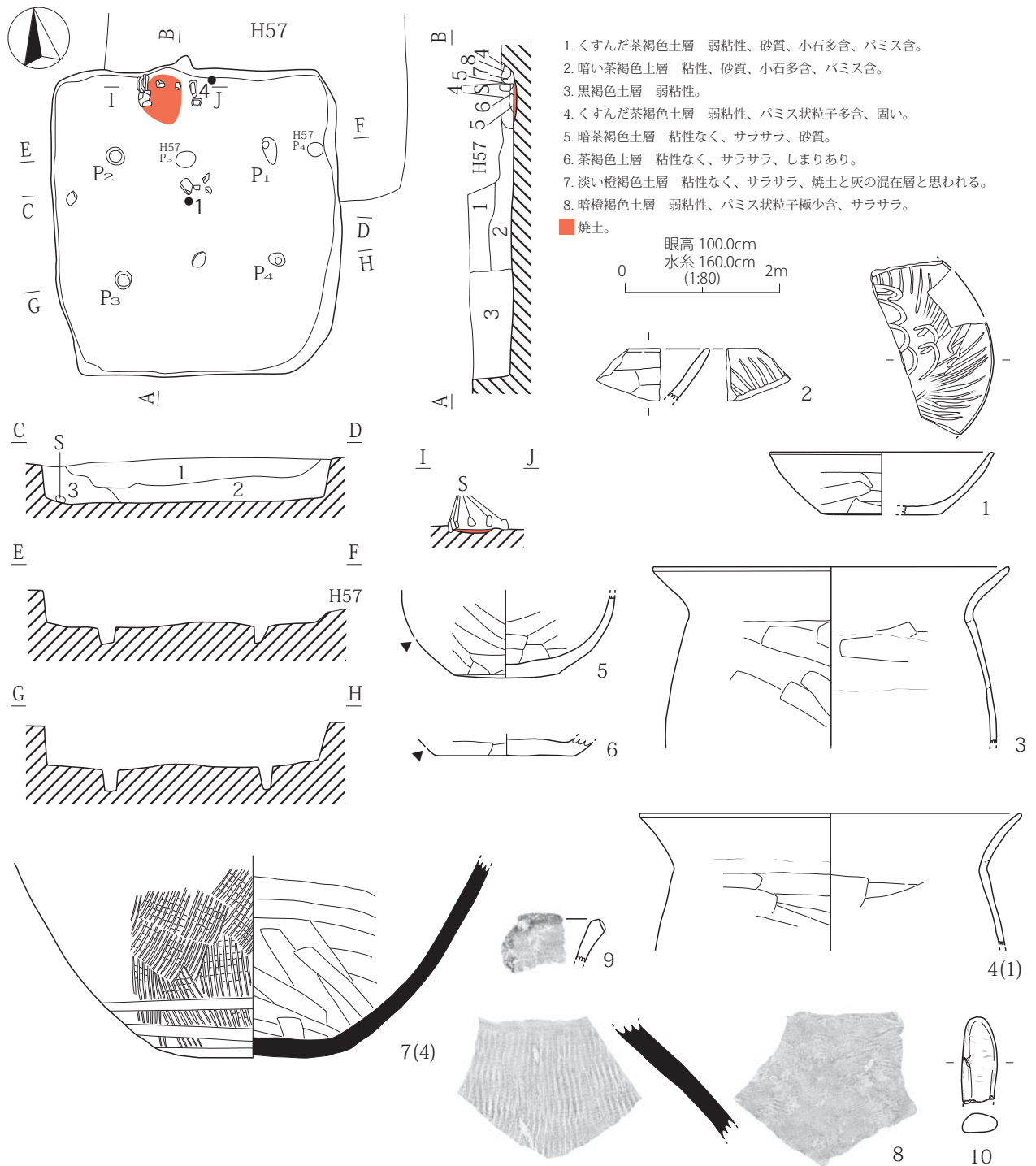
第 139 図 H104 号竪穴建物

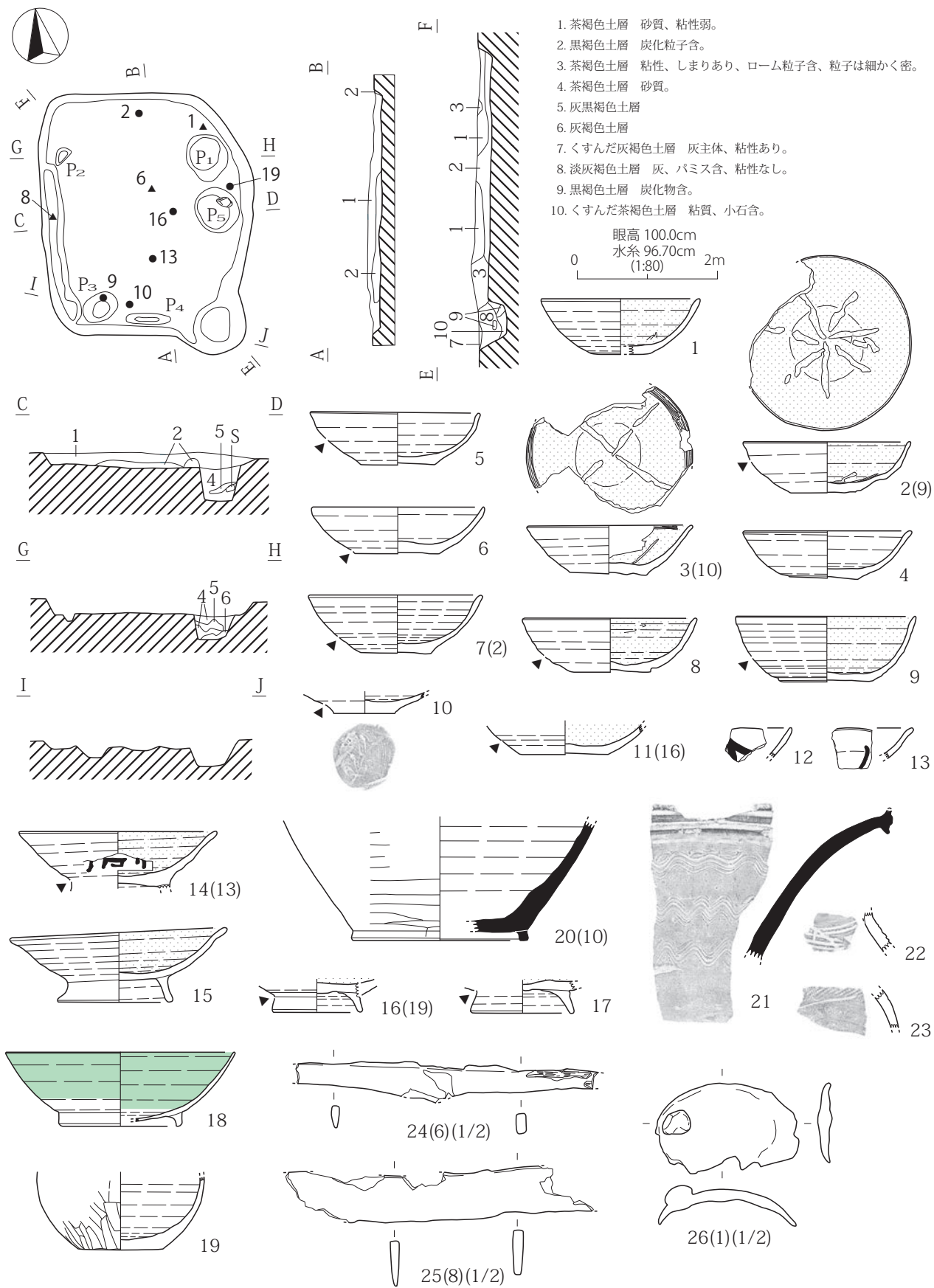


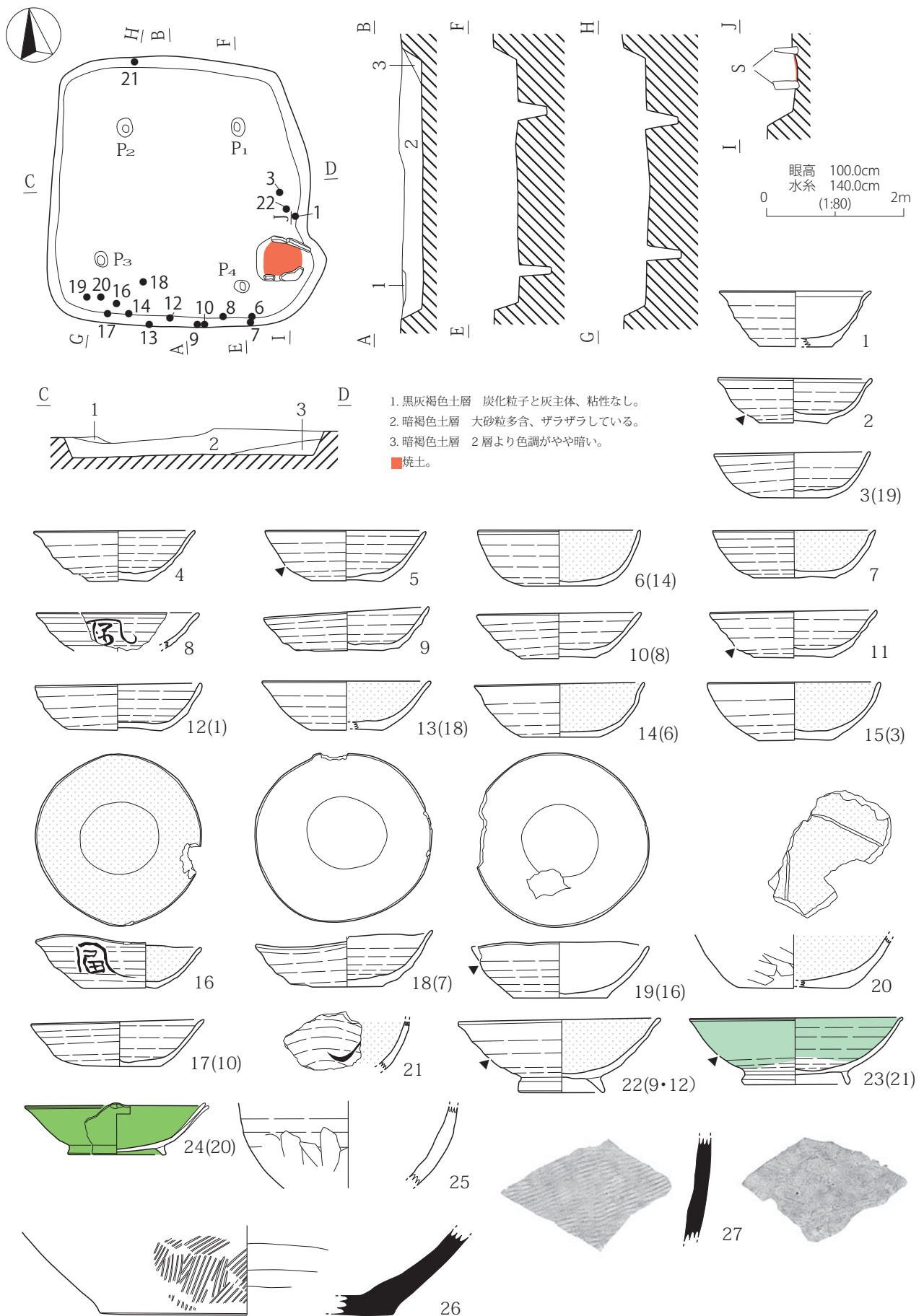
第140図 H105号竪穴建物(1)



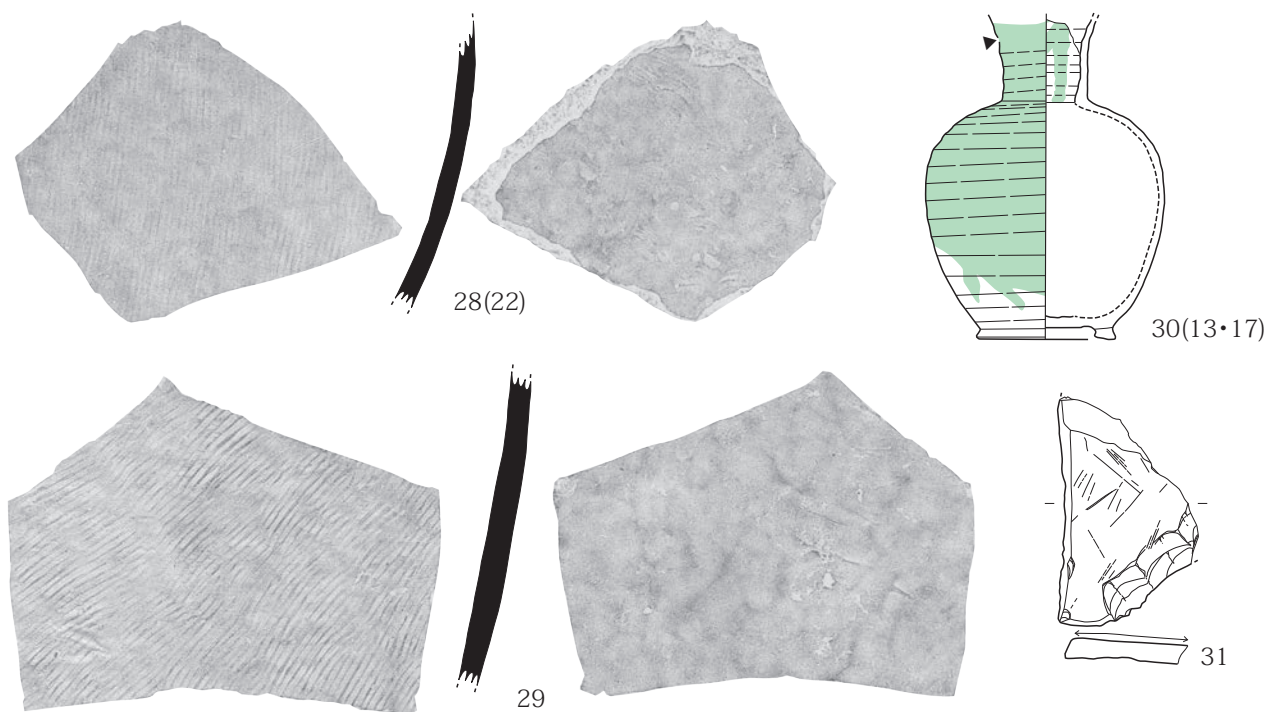
第 141 図 H105 号竪穴建物 (2)







第 144 図 H108 号竪穴建物 (1)



第145図 H108号竪穴建物(2)

古墳時代6世紀前半	H 1・3・4・5・6・8・9・10・11・13・21・29・30・32・33・36 40・41・42・48・58・138
古墳時代6世紀後半	H 2・7・15・19・22・24・27・28・31・37・43・95・132
古墳時代7世紀前半	H 16・23・25・26・35・44
古墳時代7世紀中葉	H 12・17
古墳時代7世紀後半	H 18・39・45・47・72
奈良時代8世紀第Ⅰ四半期	H 51・54・57・61・76・122
奈良時代8世紀第Ⅱ四半期	H 46・49・50・60・80・86・106・126・127
奈良時代8世紀第Ⅲ四半期	H 52・53・55・59・62・64・74・81・89・103・125
奈良時代8世紀第Ⅳ四半期	H 63・67・118・129・131
平安時代9世紀前半	H 77・79・88・93・97・101・112・115・120・128・137
平安時代9世紀後半	H 85・94・96・98・111・114・116・117・124
平安時代10世紀前半	H 66・69・70・71・73・78・83・84・87・90・91・92・100・104 105・107・108・109・110・113・119・121・130・134
平安時代10世紀後半	H 82・102

以上のように、古墳時代では6世紀代に、奈良時代では8世紀第Ⅱ・Ⅲ四半期に、平安時代では9～10世紀前半にピークが認められる。平安時代のピークについては金属器や文字資料の変化とも連動しており、この時期の西八日町遺跡の隆盛が垣間見れる。古墳時代6世紀代のピークは西八日町遺跡に限ったことではなく、隣接する一本柳遺跡群でも同様である。古墳時代前期から5世紀にかけ衰退あるいは消滅した集落が爆発的に増加している。奈良時代の増加は所謂計画集落と捉えることも可能かもしれない。そして、平安時代9～10世紀前半の集落規模の拡大、特に10世紀前半のそれが何に起因するのかは定かではないが、出土遺物からは公的な集落の匂いはあまり感じられない。しかし、朱墨の存在などからは文書の作成、訂正が行われていたようである。荘園だったのであろうか。いづれにせよ広大な西八日町遺跡の全容はまだ明らかとはなっていない。ここでの記述は推測でしかないが、傾向は提示出来たものと思う。